

## 第四章

### ガンジス平野のカーペット村

——ミルザプル・バードイ村のドゥーリー織り



バードイ村カーペット織り農家の材料置き場で監視する子ども(提供: Adrian Moser氏)

## 一 ペルシャ系カーペットと伝統的カーペット（ドゥーリー）

本章はインド最大のカーペット産地、とくに「インド伝統手織りカーペット」を世界市場に供給するミルザプルおよび、隣接するバードイ村をとりあげ、生産組織、技能継承の問題を検討する。

北インドに広がる「カーペット・ベルト地帯」の地理的分布は、インド最北のカシミールやラダック一帯から西はラージャスターンの砂漠や山脈を越えて広がる地域、そして東はアルナーチャル・プラデシ州に及ぶ広大な地域。その中心部にインド・ガンジス平野が広がる。そのほぼ中心に位置するウツタル・プラデシ州の二つの県、ミルザプル（Mirzapur）とバードイ（Bhadohi）が織機台数、生産量ともにインド最大のカーペット産地である。ここで生産されるカーペットの特色を知るために、まず、先にとりあげたラージャスターン地方の産、ペルシャ系カーペットと伝統的カーペット（ドゥーリー）の製法や絵柄についての知識が必要となる。ジャイプル市の博物館収蔵品ペルシャ・ムガル絨毯の歴史をたどると、十六世紀から十七世紀にかけてアンバー・ジャイプル王国（Amber-Jaipur）の領主たちがペルシャから収集した工芸美術品にインドカーペットの源流があることがわかる。こ

れらを模した独自の絨毯製作は十九世紀半ばごろからジャイプル、アジュメール (Ajmer)、バイカネル (Bikaner) の各地に産業として振興された。今日ではさらに、アーグラ (Agra)、エルル (Eluru)、アムリツツアル (Amritsar)、ワランガル (Warangal) など、さらには、最北部カシミール (Kashmir) も品質の優れたペルシャ系絨毯の産地として発展した。ムガル帝国の凋落とともにカーペット製作は衰退し始めるが一八五一年ロンドンで開催された大展示会を契機として繊細な図柄や文様、なかでも驚異的なノット技術に注目が集まり、インドの伝統的手織りカーペットの魅力が再認識された。とくにペルシャ系カーペットの伝統を継承するジャイプルやミルザプル／バードイの職人たちの工人技がよみがえった。カーペットの品質はノット数（縦糸と横糸の結び目の数）によって評価され価格が決定される。ちなみに、わたくしが把握したもつとも精緻な織りは博物館収蔵品や個人収集家の資料から最高のノット数 Kpsi、「一インチ（約二・五センチ）四方」をみると、カシミール産四三一 Kpsi—ミルザプル／バードイ産四一四 Kpsi—ジャイプル産一九六 Kpsi の順となる。ミルザプル／バードイ産の製品がいかにすぐれた技能と生産方式から生み出されているかがわかる。この産地は歴史と伝統をかたくなに守り続ける多くの職人から成り立つ。一方、この産地は一九八〇年代以降、旺盛な輸出需要にささえられて、さらにその不毛の農

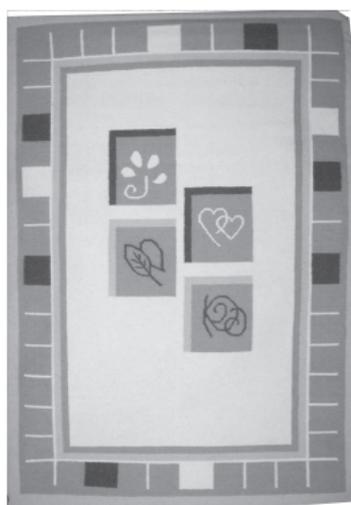
村外延部を東側の隣接する諸州、北ビハール州、ジャールカンド州、マディア・プラデーシ州の極貧農村部へと拡大してゆく。この拡大途上の産地は先に書いたように最高級の品質を誇るペルシヤ系手織りカーペットを生産すると同時に小規模家内工業の形をとる作業場で低品質、多くはノット数百四十以下のカーペットを織り続ける。ここに未熟練の子どもの仕事が生まれる。その産物のマーケットは国内市場であることは間違いない。しかしながら、輸出市場に向けられる大量受注生産には例外なく労働経験を持つ多数の子どもが関与している実態がある。輸出認証の品質は「中」から「下」以下のランクに格付けされる。低所得国向けの低価格品に特化している事例を多くの現場でみた。これは、もうひとつの世界の眼が向けられる「児童労働の地」といってよい。<sup>1)</sup>

## 二 一九九四年のミルザプル・バードイ村

産地ミルザプル市でもっとも規模も大きく、近代経営の会社組織の形態をとるオビーター社 (Obeteer Pvt. Ltd.) を訪ねる。直接雇用一一〇〇人、生産委託の独立自営職人約一六〇〇〇人を擁し、その家族や関連事業に関わる雇用を含めると約十万人の生活を支える

前渡し金、など金融面の貸借関係を基盤にして、実に、広域にわたる一大カーペット産地を形成している。前述の生産プロセスでは「カーペットを織る」の大部分の工程が自営カーペット職人一八〇〇〇人とその家族によって担われている。ここに家族労働の、そして子どもたちの働く場があり、唯一の生きる道がある。

インド最大のカーペット産地ミルザプル町とバードイ村はガンジス流域平野の中央部、ガンジス川に面する典型的な農村地帯である。乾季の農村はからし野菜培の真っ最中、一面は黄色一色である。この地を訪れた背景にはカーペット産業の児童労働がこの地から社

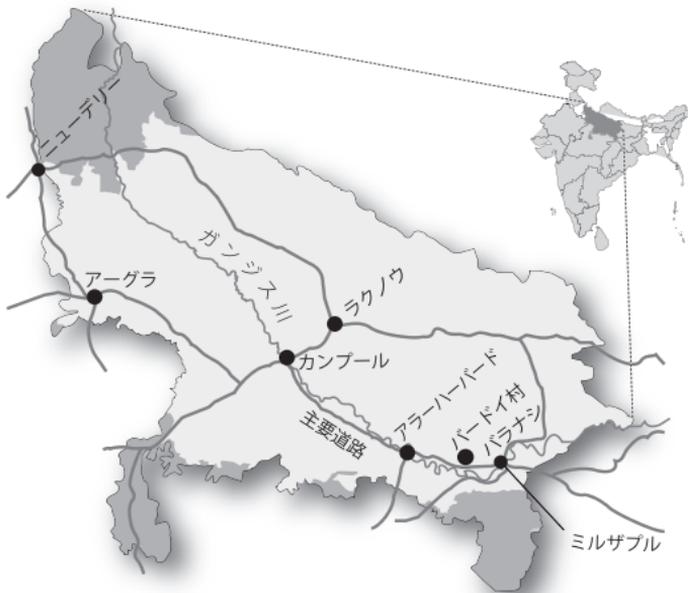


写真：バードイ村産伝統的カーペット（ドゥーリー）

提供：Exotic India

最大の会社といわれる。（一九九四年工場訪問の際のデータ）おそらく、高級カーペットの生産量・輸出量ともにインド最大のカーペットメーカーである。データ「生産委託の独立自営職人約一六〇〇〇人」に注目すると、生産委託と再委託のネットワークはミルザプル県全域に及び、農家職人の織り機購入資金の融資、原料糸の購入、その他

## ウツタルプラデシュ州



会問題として国内外の注目を浴びることになったという状況がある。そこでこの地に他に類を見ない、巨大な児童労働市場が歴史的に形成されていることに着目して、農村在住のカーペット織り職人レベルの実証的な本格的調査に先立つ予備的な調査を行うこととなった。現地にはわずか三日の滞在であったこと、農村部での実態調査を進める際の協力者、研究機関を見つけることができなかつたこと、そしてなによりも工場主、経営者、現地事務所がこの種の問題に対して極めて警戒的な姿勢を崩さない、などの理由から後日に予定していた本格調査を断念せざるをえ

なかつた。アラールハーバード市からガンジス川にそつて幹線道路を東へ、約四時間をかけてミルザプル町に着く。ここをベース・キャンプにして三日間の農村部調査を行う。前述二つの県の主要幹線道路を車で一周し、帰路は約五〇キロの距離にある巡礼都市ワーナラシー市（旧ベナレス市）に移動する。その間、幹線道路の両側には洗浄を終え天日乾燥状態のカーペットの、さながら一大展示会場とも見える光景があつた。個々の農家の庭に設けられた屋根付の機織作業場に働く家庭婦人や子どもと言葉を交わし、二つの小学校施設を訪ね、教師の直面する問題を知ることができた。この産地には他の地域では見られないいくつかの特徴がある。一つはカーペットの生産組織、二つは農村社会のなかの技能形成である。最後は変化するプロダクト・ミックスに対応する産地の外延的拡大、という三つの特徴である。

## 1 生産組織

ミルザプル町には幾つかの製糸工場があり、高品質のニュージーランド産やオーストラリア産ウールを原材料としてカーペット用の糸をつくる。機械類はイギリス製の耐用年数

をはるかに超えた産業廃棄物に等しい中古品が目立つ。一九三〇年代製造の刻印もある。原材料の糸は染色、乾燥され出荷される。機織り工場と呼ばれる生産単位は実は、大部分が一人の、独立自営の機織り職人、しかも農村に居を構える農家の土間や仮仕立ての作業小屋の呼称である。コッタージ・インダストリ、すなわち「家内工業」とはカーペット生産の場合は、このような機織職人一人と家族労働によつてささえられた生産形態を意味する。さきに描写したような、道路上に展開する無数とも見える「家内工業」を統括する会社組織はない。しかし、注意深く観察すると、製糸工場からの原材料一括購入、個々の職人への融資、半完成品（最終段階のトリミング加工前）の買取りを行う村の金融業者兼輸業者の存在が大きいことに気づく。これは業者貸付と製品買取りを中心機能とする一大会社機能という解釈もなりたち、その傘下に無数の広域にわたるカーペット職人という単一ではあるが、有機的に結合された生産単位の「工場」群が形成されているといえる。一つの村全体が、そして県全体が無数の機織りから構成された工場組織と考えたほうがよい。この産地がインド全国の八割以上の生産実績を持つことができる理由はまさに、このような柔軟でありながら強固な産地結合体を築き上げているからに他ならない。それはおよそ、一九七〇年代から始まり、続く八〇年代には旺盛な海外需要とあいまって広域の産地形成

が進行した。その主役となる大小企業家集団の多くはラージャスターン州シエイカワティ地域出身のマールワリー商人 (Marwaris) である (第三章の事例対象地域)。かれらは東インドコルコタ市や西インドムンバイ市に拠点を置く同族輸出業者のいわば現地出先機関でもあり、世界市場での価格や需要の動向をいち早くインターネットで把握し「工場」への需給調整の指示をだすことができる。産地ミルザプル／バードイのカーペット村はこうして世界市場との結びつきができた。一九九一年の経済自由化政策はこれらカーペット村の生産体制を世界市場に結びつける決定的な動因となった。<sup>2)</sup>

## 2 技能形成

ガンジス平野の中心部に位置する典型的な農業・農村地帯にあつてカーペットの輸出市場をほぼ独占する手織りカーペットのすぐれた技能はいかにして蓄積され、世代を越えて今日に到ったのか。技術や技能はそれを生み出す文化的背景とは無縁ではありえない。ジャイプルのカーペット産地にはムガル帝国時代からの長い伝統が継承された社会環境が存在した。藩王統治時代、カーペット産業は手厚い保護や育成の政策がとられた。また、専門

的な技能教育や研究開発などの機関がジャイプル市に設けられ、カーペットを含む多様な染織品製造の産地が確立した。独立後も同じように、伝統産業の保護・育成策が政府の経済開発政策の重要な柱の一つとして継承され、今日にいたる。そこには技術や技能の、断絶することのない時間的連続性がある。ところが、ミルザプル／バードイ産地には類似の性格をもつ社会環境はない。ガンジス川流域に広がる典型的な稲作農村・農業社会であつて、カーペット産地として国内のみならず、広く欧米諸国に知られるにいたつたのはせいぜい、一九七〇年代ごろからのことであつて産業形成の歴史は浅い。しかし、ここには「産業移植」という概念があてはまるような社会環境がある。カーペット産業を構成する諸条件、とくに、一連の生産工程——①デザイン、②原料糸の品質、③カーペット品質のデザイン、④織り職人の技能、⑤洗浄・仕上げの設備——をパッケージで移植できるかが産地形成の基本となる。一九二〇年代、当時、M・ガンディーの提唱する農村復興運動は貧困に喘ぐ農村に手紡ぎ・手織りの生産活動を奨励し、これがガンジス川流域農村一帯に波及していった。いまだに農家の庭先に機織や手紡機を動かす人々の姿を見ることができ。ここにはそのほかの近隣地域と同様に農村工業化の歴史的経験がある。この時期一人の企業家がカーペット産業をこの土地に移植することに成功した。今日、ミルザプル市に本拠を

置くインド最大のカーペット生産・輸出会社オビーティー社の先代創業者こそ巨大産地の生みの親である。企業家精神こそこの地に産業移植を可能としたのである。

ここで織られるカーペットはペルシャ系の手織りカーペットや手織りタフテッドカーペット、しかも高品質（ノット数三三〇Kps以上）の製品がある一方、中国やチベットの影響をうけた文様や図柄のカーペット、さらに、隣接する北ビハール地域の農村に伝わる染織の影響も見られる。ガンジス平野の中心部に位置するミルザプルは北からはチベット、ガンジスの源流カシミールやラダック地方、ムガル王朝時代のラージャスターンの強い影響を受けカーペット織りの技術・技能を定着させたと思われる。一方では、東からの影響、とくに北ビハール地方の土着の装飾文化をとりいれ、また、宗教都市ワーナーラシーの求める巡礼地需要に応えるようになった。農村社会に深く根を張り詰めた職業カーストが技術・技能、そしてなによりもカーペット織りの繊細な感性を熟成させた。このようにしてミルザプルは多様なプロダクト・ミックスを供給できる技術的条件が次第に成熟し、今日、インド最大の生産基地へと進化した。

### 3 産地の外延的拡大

九十年代初頭、経済自由化がもたらした一大輸出ブームはカーペット産業から始まる。すでに述べたように、その担い手たる生産地は広くガンジス流域の農村地帯、ウツタル・プラデーシ州の二つの県ミルザプルとバードイを中核地域とし、さらにアラールハーバードに拡大する。その後さらに、南東部の隣接州ビハール州や、丘陵地帯ジャールカンド州 (Jharkhand) 農村部ガルーワ県 (Garhwa)、およびギリディー県 (Giridih) に浸透してゆく。これらの生産地域を総称して「新・カーペットベルト地帯」と呼ぶことにする。「児童労働の地」として国内外の厳しい目が向けられるようになり、多くの取材報告がきわめて劣悪な作業環境におかれる子どもの姿を白日の下にさらすことになる。<sup>3)</sup>

新・カーペットベルト地帯を構成する五つの県の総人口数(二〇〇一年現在)約一一〇〇万人、うち六歳児未満未就学の子ども(二〇〇五〜六年度推定)は約二二〇万人。就学生徒数(クラス一〜七)約一七一万三〇〇〇人(二〇〇五〜六年度推定)。これらは人口統計から推定したもので、これとは別に労働力推計などから児童労働数を求めたいくつかの研究があるので参考までに紹介する。これらはすべて国際機関やインド政府の資金援助を受けた

委託調査であり、その推計値については一定のバイアスがかかっていることに注意する必要がある。一般的傾向としては国際機関ILO、UNICEF、UNDPなど、また国内外人権団体などNGOの推計値は「過大」に、またインド政府機関のそれは「過少」に示される傾向がある。ちなみに、全土に拡大するこれら主要産地で手織りカーペットに生計を依存する人口はおよそ二五〇万人に及ぶとする推定もある（前掲Asha Rani Mathur 著八三ページ<sup>(4)</sup>）

この産地が新たな「児童労働の地」と呼ばれる理由はカーペットの生産規模が巨大化することに対応してさらに安価な労働力を必要とすること、また低級品の生産に適した未熟練の子どもの労働を近接農村の外延部に求める必要があること、などによる。また産地産品の需要構造の変化がある。高級品と最上級品（ノット数三三〇Kpsi以上）の手織りカーペットは主として欧米市場へ、中級品（ノット数二二〇〜三三〇Kpsi）および低級品（ノット数〇〜八〇Kpsi）は途上国向け、主として中所得国向けおよび、海外市場の実績があるアフリカ諸国などに輸出先を選別する。輸出戦略に応じて、この新たな産地は中品質から低品質のカーペット類、壁掛け用ラグ、ドゥーリーなどの製品生産のために低熟練・低賃金の子どもを投入することになる。地域的には北はネパール国境に近い、山岳辺境地帯、東は同じ

く国境に近いビハール州北部最貧困な人口稠密な地帯、そして、南東はかつてチョータ・ナグプールとよばれた地帯、今は一つの行政地域となるジャールカンド州一帯。これら辺境の地は山岳部族から構成される。経済的にも、また社会的にもインド全土のなかで最も後進地域と位置づけられる地域である。かれらはまた、ヒンドゥー社会の最下層あるいは、ヒンドゥー教の社会秩序の外側に位置するダリット (Dalit) の民である。かつては「不可触民」とよばれた階層の人々である。

この地域のそれぞれの部族社会には古くから伝えられてきた独自の機織技術、文様、図柄、などが今日にいたるまで生き続ける。すべてが自家消費の経済から成り立つ。ところがここに商業主義の、しかもグローバル企業のカーペット生産が導入されることになる。その動きは九十年代後半から急速に進展する。後進地域の奥深くに農民家族を一つの生産単位とする「家内工業」が奨励され、カーペット織りの村が誕生する。そこには、後進地域の経済的、社会的地位の向上には子どもを労働力として市場に投入することも必要だとする市場の論理がある。児童労働を否定するのではない、むしろ容認する社会感性の広がりがある。これはラージャスターンの事例と同じように、伝統の技能継承には子どもの労働は不可分、とする論理と同類の思惟・発想である。

広大なガンジス平野から四方に広がる周辺山岳地帯には、世界市場と深く関わる新・カーペットベルト地帯が拡大を続け、新たな産地誕生の過程にある。もう一つのカーペット「児童労働の地」が出現したのである。ドゥーリーという名のカーペットはいつの日か、先進輸入国の消費者とジャールカンド山岳民族の間にあるとてつもなく長い距離を一挙に短縮するに違いない。これをグローバルバリゼーションの不可避的なプロセスとするならば、カーペット生産に参加するサンタール族農民 (*Santal*) に公正で平等な労働の成果を保障する仕組みが必要である。かれらはダリットと呼ばれ、ヒンドゥー社会の最下層に置かれイギリスの植民地時代、繰り返し搾取され続けた悲惨な歴史をもつ民である。その昔、アヘン戦争（一八四〇～四二年）中には中国輸出用のケシ栽培を、続く十九世紀末には、ヨーロッパ輸出品として植物染料の原料インディゴの栽培を強いられ、化学染料が発明されるともに彼ら農民は放置され忘れ去られた。彼らはいつとも、時の支配者の説得や半ば強制によって有望で利益のあがる換金作物の転作を繰り返し返してきた。「サンタールの反乱」と呼ばれる武装蜂起もあったが、イギリス勢力によって鎮圧された歴史もある。今、サンタール農民は輸出用カーペット生産の担い手として期待され、そして彼らの歴史経験になかった強烈な「市場」という圧力にさらされている。グローバル企業の一生産単位、「自営カーペット

職人」になることは、「飢餓的貧困」からの脱出の路につながるのか、子どももの「不就学」解消の決め手になるのか、ジャールカンド州サンタール族農民の選択の幅は限られている。

#### 4 限界農民の教育機会

ダリット (Dalits) とはヒンドゥー社会を依然として規定するカースト制度の最下層 (Low caste) または、不可触民 (Untouchables) あるいは、アウトカースト (Outcastes) の民をいう。政府は二〇〇〇年、カースト制廃止を定めた憲法に違反するとしてこの用語の使用を禁止、法律用語としては「指定カースト (scheduled castes) / 指定トライブ (scheduled tribes)」、略称をSC / STに統一した。「ダリット」人口はインド全土で二〇〇〇年現在、約一億七〇〇〇万といわれ、人権意識の高まりとともに地域政治への発言力が強まる。しかし、経済的・社会的には社会の最底辺に留まる膨大な農民階層であることに変わりない。これを指して「限界農民」と呼ぶことにする。

わたくしは一九六〇〜六二年、インド滞在中にジャールカンド州炭鉱の町ダーンバード (Dhanbad) 県一帯に定住するサンタール族の調査をしたことがある。大部分が指定トライブ

ブに属する山地農民の階層である。そこに見た農村生活の暮らしはその後、貧困問題を語るときに欠かすことのできない人間生存のベーシック・ミニマム概念、すなわち「飢餓的貧困」が村々を越え広大な地域空間に広がる現実を見た。今、あらためてインド政府の教育統計（二〇〇五〜〇六）を見ると、初等教育の分野でも、かつてダリットと区分され、社会から排除されてきた膨大な規模の人口、今は、法的保護を受けるSC／ST記号で区分される人々が未だに初等教育の機会を受けることなく、むしろ拒絶されている現実を知る。若干の統計数値をあげるだけで、「教育の貧困」を示すに十分である。州全体の村落数三二六二〇村のうち三四八村には授業の有資格者ゼロ、一二九一村の男子識字率はおよそ一〇%、一四三三村では女子識字率ゼロ、州全体で見ると識字率五三・六%、うち男子が六七・三%、女子三八・九%の低きである。都市部と農村部の教育格差も大きく、都市部女子の七〇%に対して農村部二九・九%、三人に一人が読み書きができるに過ぎない。このように教育機会へのアクセスを持たない農村人口は当然、経済的には「飢餓的貧困」状態、そして社会的には「抑圧と差別」の状態に置かれる。これら現実の姿を伝える二つのエピソードを紹介する。<sup>5)</sup>

①中央ならびに州政府の支援により「文盲撲滅プログラム」(Total Literacy Programme)の一

環として「学校給食」スキームが始まった。その結果、しだいに子どもが学級に戻るようになったが、給食調理人（女性）が「Bawri」（ダリット）カーストであることが知れるところとなり子どもの両親を巻き込む騒動に発展、三カ月間給食は停止した。カースト最下位のダリットの調理する食事は「穢れ」たものであり、これを食することは到底容認できるものではないとして親たちが給食を拒否したのである。この騒動は州全域の公立学校に飛び火し暴動を引き起こし、当局はやむなく、すこし上位の「高位カースト」の調理人に替えた。政府が伝家の宝刀とする法律「SC／ST残虐行為防止法―一九八九〔the SC/ST Prevention of Atrocities Act 1989〕」をもってしても、カースト慣習の根幹にある「穢れ」の思想や慣習を排除することはできなかつた。

②同プログラムはスローガンを使って子どもとその両親に呼びかけをおこなっている。引用すると、“Adhi Roti Khayenge, Phir Bhi School Jayenge”「お腹がすいていても、学校には行こう！」と。学校に行けば給食がある。だが、州全土には四〇万人を超す子どもが空腹をすこしでも満たすために労働についている現実がある。そして、これら限界農民層の未熟練児童労働はカーペットの産地に組み込まれようとしている。

第4章 ガンジス平野のカーペット村

表C. 拡大する産地

州 (State)	県 (District)
Uttar Pradesh	Varanasi, Bhadohi, Gopiganj, Khamaria, Ghosia, Madhosingh, Mirzapur, Agra, Shahajahanpur
Jammi & Kashmir	Srinagar, Baramulla, Anantnag, Jammu, Leh
Rajasthan	Jaipur, Bikaner, Tonk
Punjab	Amritsar
Haryana	Panipat
Madhya Pradesh	Gwalior
Bihar	Obra, Danapur, Madhubani
Himachal Pradesh	Dharmshala
West Bengal	Darjeeling
Andhra Pradesh & Elluru	Warangal
Karnataka	Bangalore
Pondicherry	Pondicherry

出所: Indian Carpet Export Promotion Council, New Delhi

表D. 好調の輸出実績

品目別輸出額の順位	単位: 100万US\$ (対米ドル40.2513ルピー)
1. 手織りウール・カーペット (Handmade Woolen Carpets, Rugs, Durries)	515.90
2. 手織りウール・タフテッド・カーペット (Handmade Woolen Tufted Carpets)	287.40
3. 手織りシルク・カーペット (Handmade Silk Carpets)	55.12
4. 手織り合織カーペット (Handmade Synthetic Carpets)	17.29

期間: 2007~08年4/3月期

出所: Indian Carpet Export Promotion Council, New Delhi

表E. 上位10輸出相手国の順位

	国	金額 (100万US\$)
1.	アメリカ	403.04
2.	ドイツ	153.52
3.	イギリス	41.61
4.	日本	14.30
5.	フランス	12.52
6.	オーストラリア	11.23
7.	イタリア	10.01
8.	カナダ	10.98
9.	スペイン	8.56
10.	オランダ	7.99
	小計	673.76
11.	その他	134.18
	総計	807.94

期間: 2007~08年4/3月期

出所: Indian Carpet Export Promotion Council, New Delhi

注(1) カーペットの生産と輸出

独特の模様や多様な品質のカーペット生産が旺盛な輸出需要にささえられて九十年代以降、着実に伸びてきた。現在、産地として組織化された地域および輸出実績等は次の表C、Eの通りである。

(2) バードイ村のカーペット職人

スイス人写真家エードリアン・モザー氏 (*Adrian Moser*) の写真集『Carpet People of India』は二六枚のモノクロ写真から成る。二〇世紀最後の年、一九九九年のバードイ村カーペット製造工程を現地撮影した秀作である。これはスイス・ベルンで開催されたセバスチャン・サルガド (*Sebastião Salgado*) 写真展の一部として発表されたもので、同氏のご好意により同じ写真集録はアジア経済研究所図書館写真・資料展「一九九〇年代のインド社会と子どもたち」(二〇〇八年一月四日～二月二十五日) にも出展された。この一連の写真は世界商品クラスのペルシャ系カーペットやインドの伝統的カーペット(ドゥーリー)が織られる製造過程を見事に映し出したものである。これらはインターネットで公開されている。 <http://www.adriamoser.ch>

(3) 新・カーペット・ベルト地帯

Asha Rani Mathur, *Indian Carpets: A Hand-Knotted Heritage* (New Delhi: Rupa&Co., 2004), P. 83.

(4) 児童労働の統計

表Fに示す。最近年の統計は不明。

(5) “Right to Education at Crossroads in Jharkhand”, by Goladson Dungkung, in Counter Currents, org. 03 January, 2008

表F. 児童労働の統計

調査対象年次	児童労働の総数 (人)	推定の根拠、出所
1. 1993	130,000	① Anker, Richard 他
2. 1993	350,000	② Juyal, B. N.
3. 1994	130,000	③ Harvey, Pharis 他
4. 1995	150,000	④ Burra Neera

[出所]

① Anker, Richard and others (ed.), *Economics of Child Labour in Hazardous Industries of India* (Baroda: Centre for Operation Research and Training, 1998) (Mimeo.).

② Juyal, B. N., *Child Labour in the Carpet Industries in Mirzapur—Bhadohi* (New Delhi: International Labour Organisation, 1993).

③ Harvey, Pharis and others, *Trading Away the Future: Child Labour in India's Export Industries* (Washington DC: The International Labour Rights and Education Research Fund, 1994).

④ Burra Neera, *Born to Work: Child Labour in India* (New Delhi: Oxford University Press, 1995).

その他の参考資料

⑤ Mohd. Mustafa and Onkar Sharma, *Child Labour in India: A Bitter Truth* (New Delhi: Deep & Deep Publications PVT. Ltd. 2008). Appendix.

⑥ Vijayagopalan, S., *Child Labour in Carpet Industry* (New Delhi: National Council of Applied Economic Research, 1993).

⑦ Mishra, G. P. and P. N. Pande, *Child Labour in Carpet Industry* (New Delhi: A. P. H. Publishing Corporation, 1996).

⑧ Davuluri Venkateswarlu and others, *Child Labour in Carpet Industry in India: Recent Developments: Final Report* (International Labour Rights Fund, 1996) (Mimeo.).

